

JELA NEWS

ジェラ ニュース 第20号 2009年11月15日発行 発行責任者 森川 博己

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援/アジア子ども支援/ブラジル子ども支援/ボランティア派遣/リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座/奨学金制度/宣教師支援

「私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます」

「お前たちは、わたしが飢えているときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ、はっきり言っておく、私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」 マタイによる福音書 25章35節～36節、40節



JELA百周年を祝う!

JELAは1909年6月21日に社団法人として設立され、今年で百周年を迎えました。創立以来さまざまな活動を行ってまいりましたが、それらすべてを導き支えてくださった神様に感謝を奉げると共に、支援者・関係団体の皆様にお礼を申し上げる次第です。

記念の年をお世話になった宣教師の先生方と祝うべく、永年

日本で奉仕された長期宣教師の皆様にお声をかけたところ、9月22日の記念礼拝と感謝パーティに、総勢四十名以上をお招きすることができました。これに、現在日本にいらっしゃる宣教師の先生方や日本人関係者を併せて、百名以上の方々にお集まりいただき、記念行事を催すことができましたのは、わたくしどもの大きな喜びです。心より感謝申し上げます。

【この号にはこんな記事が】 百周年記念礼拝・感謝会 …… 2-5 ブラジルボランティア報告 …… 5 JELA歴史コラム6(長尾博吉) …… 6 米国キャンプのスタッフとして参加して(松岡あゆみ) …… 6 明日が見える生活へ(佐藤直子) …… 7 グループ・ワークキャンプ2010参加者募集 …… 7 お知らせ JELAを支える市ヶ谷教会でのコンサート キャロル・サックが山田洋次監督作品に出演支援者一覧 など …… 8

JELAは1909年6月21日、「在日本アメリカ合衆国南部福音ルーテル教会ユナイテッド・シノッド宣教師社団」として誕生し、本年で創立百周年を迎えました。この記念すべき時に、改めてこれまでの年月を振り返り、主の豊かな導きと多くの皆様方からの温かいご支援を

記念礼拝

恵比寿のJELAミッションセンターにおいて、松岡俊一郎牧師の司式、アンドリュー・エリス先生の説教、中山康子姉の奏楽によって厳かに、そして和やかに執り行われました。聖餐式ではキャロル・サック宣教師がハーブを奏で、杉本洋一牧師と浅野直樹牧師に配餐のお手伝いをいただきました。後奏ではケネス・デール先生の軽快なピアノ演奏が流れ、記憶に残る礼拝となりました。集まった方々の感謝の気持ちを神様が喜んで受けとってくださったと思います。



今回来日された宣教師の先生方

- Inez Baskerville
- Mahlon & Nancy Bekedam
- Wilbert Ericson
- Kenneth & Eloise Dale
- Leeland Griess
- Marilynn Hays
- Grace Ingulsrud
- Luther & Dorothy Kistler
- Lyle & Melba Larson
- Jerry & Janice Livingston
- Norman Lund
- Mark & Shirley Luttio
- Philip & Margaret Luttio
- Stephen Luttio
- Edwin McGee
- Timothy & Yuriko Mason
- Miriam Olson
- Joyce Sloss(Osborne)
- David & Nahoko Person
- Marian Rasmussen
- Saul & Mary Kay Stensvaag
- Jeffrey Truscott
- Gehard & Bertha Vorland
- Carl & Elaine "Westby, Jr."
- Paul & Steve Winemiller



オルソン夫人(Olson, Miriam)

主人が来れないのが残念です。主人はアメリカでナースリーホームに入っています。食べもできないし歩くこともできない状態です。ただ、心はここにあると思います。

リビングストン先生(Livingston, Jerry)

愛する兄弟姉妹よ、ただいま！ その答えは？(会場から「おかえりなさい！」の大きな返事)。日本に帰ってきて(私は)元気になるんですね。皆さんそう言うんです。元気がなくても、飛行機から降りて日本に立つと元気になるんです。きょうは皆さんとこういうふうにお祝いすることができて嬉しく思います。私はアメリカにいても心は日本人ですので変なガイジンです。日本にいたときも変なガイジンだったんです。(隣の女性に腕をまわしながら)この方は、愛するジャンヌです。彼女がいなければ、私は40年、日本にはいらなかったんです。



百周年記念特集

覚えて、去る9月22日、感謝の催しを開催いたしました。中でも長期宣教師として永年滞日し、日本の各地で伝道、社会福祉、そして教育などキリストの愛を伝える活動にご貢献下さった先生方をお招きし、ともに100年の歩みを神様に感謝し、旧交を暖めました。(表紙写真も)



ステンズバーク先生 (Stensvaag, Saul)

こうして、いろいろ懐かしい顔を見て、いろんな良い思い出がわいてきます。きょう、こんな良い時間をもて、ありがとうございます。

サック夫人 (Sack, Carol)

今日はこんなにたくさんの、私たちに
とって大事な先輩・指導者たちと一
緒にすごして、本当に感謝です。



ハウスクネヒト先生 (Hausknecht, Phillip)

釧路と北九州で開拓伝道をしたあと、アメリカに帰って引退しました。家内が熊本出身の日本人で、アメリカでまだ仕事をしています。アメリカ人の私は日本の教会で牧会をしています。これは新しい世界の象徴です。これから日本の教会がイエスのしもべとして生き続けることを祈ります。

マッケンジー先生 (McKenzie, Timothy)

私が24年前に短期宣教師として日本に来たとき、いまこの台に立っていらっしゃる先生たちのほとんどは日本で働いていらっしゃいました。きょう同じ部屋で多くの懐かしい顔とお会いできるのは、たいへん、たいへん嬉しいことです。そのことが実現するためにJELAがこのような素晴らしいことをしてくださったことを心から感謝申し上げます。これからはJELAの動きの上に神様の祝福がありますように。



メイソン先生 (Mason, Timothy)

キャロルさんと同じように、ほんとうに大切な先輩たちといから感謝しています。いま、ハワイ州の教会で働いていますけど、毎日、日本の経験を思い出しています。いつまでも宣教師の心を持つつもりですから、皆さん、イエスにすがって、いっしょけんめい伝道してください。



デール先生 (Dale, Kenneth)

話をしようと思えば、きりがありません。ここに集まっていっしょの日本人の方々に感謝申し上げます。45年間もここで仕事を与えてくださいました。奉仕させていただきました。本当にそのとおりです。奉仕させていただけたことに感謝です。いっばいです。



ルティオ先生 (Luttio, Phillip)

38年ぐらい日本に住んで働きました。自分の国と感じました。そして、いま戻ってくる機会を与えられて、心がいいです。すばらしいことです。私たちは勇気を与えられます。そして、自分からも、できる限り勇気を与えようと思わされます。

感謝パーティ

記念礼拝の後、会場を渋谷エクセルホテル東急に移し、感謝パーティが催されました。中川浩之・JELA理事長のあいさつに続き、渡辺純幸・JELC総会議長、フランクリン石田・ELCA世界宣教局アジア主事、石原寛・ルーテル学院大学理事長、アメリカ・サウスカロライナ、ルーテル南部神学校ミラー校長から祝辞をいただきました。なごやかな歓談の中で、参加された宣教師の先生方全員から一言ずつお言葉をいただく楽しい時間を過ごした後、最後はルティオ・ファミリー7名による「輝く日を仰ぐとき」の演奏(ヴァイオリンとソプラノ・サクソ)と歌唱に導かれ、会場の百余名全員による大合唱で2時間半に及ぶパーティの幕が閉じられました。



<来日されなかった先生がたからの便り ほか>

●アンダーソン先生(Delbert Anderson)より

JELAと神学校から百周年記念行事の招待状を受け取ったとき、私の心はどれほど大きな感動につつまれたことでしょう。手紙を読みながら、LCAとELCAから日本に派遣された遠い昔のことがあぎやかに蘇ってきました。そして、現在のJELAと神学校の発展した姿、その発展に尽されたリーダーの方々のことを思いめぐらしました。百周年という節目に共に集まり、祝いつつ将来を展望される皆様方一人一人のことを祈りにおぼえます。JELAのご招待をお受けできないのが本当に残念です。じつは、数週間後に妻が膝の手術を控えています。彼女は3月にも、別の膝を手術しました。さいわい結果は良好であり、今回の手術うまくいくようにと願っていますが、術後の2ヶ月がとても重要であり、順調な回復のためには様々な訓練・療法に服さなければなりません。百周年行事の招待者リストに私を加えていただいたことを、心より嬉しく思っています。ありがとうございます！日本で奉仕していた当時の日本の皆様方のお心遣いやおもてなしを思うと、今でも心が熱くなります。日本での行事に参加はできませんが、アメリカの地から祈り心で皆様のことを思っていますので、9月22日・23日にお集まりになるすべての方々よろしくお伝えください。詩篇にありますように、「今日こそ主の御業の日。今日を喜び祝い、喜び踊ろう」(詩編118編24節)と言える二日間でありますように。もう一度、私たち二人から皆様への感謝の気持ちをお伝えし、この便りをしめくくることにいたします。

●ディール先生(Harold Deal)より

JELAの百周年記念行事にご招待いただき、驚くとともに光栄に思います。何をとても馳せ参じたいところですが、80歳を超えて体が思うように動かなくなりまして、日本へ行くことができません。私は今年の4月8日で86歳になりました。1959年に日本を離れてからは、テキサス州やフロリダ州の教会で働き、退職後も嘱託として牧会をしておりました。妻のミリアムも米国のいくつかの教会でオルガニストや聖歌隊のリーダーとして奉仕しましたし、ワシントンの日本の企業では数ヶ月間、日本語を使って(!)働きました。長男のデービッドは東京の衛生病院で生まれ、今はELCAの牧師としてペンシルベニア州バックス郡にて牧会を

しています。二男のスティーブンは海外宣教の召命を受け、中央アメリカ(ガテマラ・エルサルバドル・ニカラグア・ホンジュラス・コスタリカ)を統括するELCAの職に就いており、コスタリカで家族といっしょに暮らしています。京都で生まれた娘のキャロルはヴァージニア州でソーシャルワーカーとして高齢者の方々を支援しています。百周年記念式典に参加されるすべての方々へ”ヨロシク”とお伝えください。予定されている各式典に聖霊が共にいてくださいますように、また日本の福音伝道とその発展への新しい時代に向けて、主が日本の教会を励ましてくださいますように。

●カニングハム夫人(Eleanor Cunningham)より

今年の1月に夫のボブが膵臓ガンと診断され、ホスピスの助けも得ながら自宅で看病にあたりましたが、7月9日に天に召されました。82歳でした。私たちは5人の子どもがいる7人家族でしたので、日本の仲間からよく、「7年目のカニングハム家」と呼ばれていました。7年ごとに、益田、神戸、高松、西条、広島、松山と新たな場所に遣わされたからです。福音をのべ伝えつづけている方々全員のために祈っています。

●スワンソン先生ご夫妻

(Ed & Ruth Swanson)より

9月のJELA創立百周年記念礼拝とお祝いの会にお招きいただきありがとうございます。私たちは約50年前に宣教師としてJELCの宣教の働きにたずさわることができ、光栄に思います。お祝いにぜひとも参加したいのですが、健康上の理由からそれはかないません。長年にわたり教会と「福音の交わり」に与ることができたことを、神さまに感謝します。日本の皆さまのために、また日本で主の御国の働きが続くようにとお祈りします。日本の教会と信徒の皆様との貴重な思い出を大切にしつつ、福音を前進させる働きの中で神さまが確かに一緒にいてくださることを信じ、感謝します。栄光に満ちた神さまが日本の教会をこれからも祝福されますように。

●エスキルセン先生ご夫妻

(Edward and Marion Eskildsen)より

私たちのことをお心にかけていただけて嬉しく思います。日本に行きたいのですが、老齢と健康がそれを許さないのが残念です。日本での貴重な思い出、いっしょに奉仕

した牧師先生方と信徒の皆様との交わりは私たちにとって大いなる恵みであり喜びです！JELAの皆様にご挨拶を申し上げます。日本での宣教の働きと、教会の皆さま及びJELAの皆様すべてに、これからも末永く神の祝福がありますようお祈りいたします！

●ファイル先生(Paul Feil)より

私たちを日本の宣教の仲間として快く受け入れてくださったJELCの牧師先生方や信徒の皆様にご心より感謝を申し上げます。JELAの百周年のお祝いと主の御名による今後の働きを神さまが祝福してくださいますように。

追伸：妻ドロシーは1991年3月9日に亡くなりました。彼女は1951年に日本での福音伝道と医療奉仕を始めました。私が来日する3年前のことです。私たちは1956年5月5日に日本ルーテル神学校で結婚しました。

●ソーレンソン夫人(Dorothy Sorenson)より

私の夫、モーリス・ソーレンソンJr.は1999年に亡くなりました。私たちはアメリカに帰還した後、1981年と1984年に家族で来日することができました。以前に奉仕していた本郷教会・学生センターの方がたと交わりを持つことができ幸いでした。現在の本郷教会の建物は私たちが帰国した直後の1965年に建てられたものです。1984年の来日時には、住んでいた宣教師館や近所の公園などを目にするのができ、楽しい一時でした。私の娘も2004年に夫と娘二人と一緒に来日することができました。彼女たちも本郷の方々に歓迎されました。私たちはよく日本のことを考えます。1953年から1965年にかけて日本で生活し働いたことでどれほど多くのことを学んだことでしょうか。私たちの視野を広げてくれる貴重な経験をしたのです。神さまの御言葉に、そして日本におられる信者の兄弟姉妹とのお交わりに感謝しています。神がJELAの記念の日を祝福されますように。共に主イエスに心をおゆだねし、喜びと恵みにあずかれますように。

●九州学院から頂戴した祝電

日本福音ルーテル社団、創立百周年おめでとうございます。1909年6月21日「在日本アメリカ合衆国南部福音ルーテル教会一致シノッド宣教師社団」として認可されてから百年の歩み、激動の戦前、戦後の時代を歩んでこられた公益法人としての社団は日本

福音ルーテル教会並びに学校、福祉施設、幼児教育施設の生みの親でもあります。その意味で社団の百周年の節目を覚えることは、アメリカの福音ルーテル教会の方々の祈りと使命、さらに献身のご奉仕があったことを深く想起するものであります。今あらためて感謝いたします。第二世紀に向かって、公益法人としての社団の新しい歩みは変化を余儀なくされていると存じますが、日本福音ルーテル教会や関係諸施設と連携しながら、より希望と活力のある働きがなされますようにお祈りいたします。

日本福音ルーテル社団の発展と、神様からの大きな祝福がありますようにお祈りしつつ。
2009年9月22日

学校法人 九州学院
理事長 長岡 立一郎
院長 内村 公春

ブラジル ボランティア報告

原田 愛

●授業のお手伝い

サンパウロにある教育福祉施設カーザマテウスでの私の仕事は、主に授業を手伝うことです。月曜日と木曜日は読み書きとコンピュータの授業を手伝っています。これらの授業には7歳から14歳の子どもがいますが、読み書きができない子どもが本当に多いのに驚きます。小学校5年生で全く字が読めない子もいます。しかし、ほとんどが1年で読み書きができるようになるといえます。



どうして、何年も学校で勉強していて、読み書きができないのでしょうか。先生たちの話や、子どもたちの様子を見てわかってきたことは、彼らが勉強のできる家庭環境にいないことです。家庭での心配事や不安を学校にも引きずっており、勉強に集中できない、または寂しさから注意を引こうとわざと騒いだり、いたづらをしようとする、もしくは発達障害を持っているようです。これらに対して、学校では対応しきれていないのが現状です。私が住んでいるマウア市の教育は他の市と比べても決して良いとは言えないようです。

そんな子どもたちの活動を補助するのが、私の主な役割です。全く読み書きができない子の横に座り、一緒に活動を行ったり、わからないところがある子を手伝ったりします。ここにきて4か月がたちましたが、まだまだ子どもたちには試されてばかりで、きちんと話を聞いてもらえるようになるには、もう少し時間がかりそうです。

●子どもたちとカポエイラ

また、ブラジルの格闘技カポエイラの授業に参加し、子どもたちと一緒に練習しています。勉強中は、動き回ったり、騒いだり、喧嘩をしたりしている子どもたちも、カポエイラの授業のときは真剣です。一生懸命に練習している姿を見て、いつも感動してしまいます。もし、カーザマテウスがなければ、一日路上で過ごし、悪いことも覚えてしまっていたかもしれません。一生懸命に打ち込むこと、仲間と一緒に練習すること、教えあつて助けあうこと、さまざまなことをここで学んでいるのだと感じます。年末には試験があり、それに受かると帯がもらえます。この試験は、試験の日だけでなく、日頃の練習態度なども考慮されます。1年目は緑、2年目は黄色、青、黄色と青などと、帯の色が変わってくるのです。試験の日も近づいてきて、子どもたちの練習にも熱が入っています。



中島 涯

○施設での活動

ポルトアレグレにある青少年教育福祉施設CEDELでは毎週木曜日の午前中に、折り紙を教える時間を貰って子ども達に教えています。また、クラスの先生に頼まれて木曜日以外の時間に教えたりしています。その他、テニスの授業が離れた公園であるので子ども達をバスに乗せて公園まで連れていったり、一緒にサッカーをしたり、日常会話でコミュニケーションをとったりして日々を過ごしています。

幼児の保育施設LUPIでは、担任の先生の補助をメインでしており、仕事内容としては子ども達と一緒に遊び、工作やお絵描きの手伝い、昼ご飯の準備など様々なことを手伝っています。又、週に2日子ども達にパソコンを教えています。問題としては、ブラジルの子ども達は日本の子どものように言うことを聞かないので、毎日苦勞させられています。

○大学での学び・生活上の体験

週に2回大学にポルトガル語を習いに行っています。内容は、同じ外国人同士で色々なテーマにそつて話をしたりと楽しく授業を受けています。また、週に一度レッスン後に先生から居残り授業を1対1でして頂いています。理由は、留学生の中に僕が居るので、わからない文法や単語が多いからです。

食事の面ではインゲン豆を煮たブラジルの家庭料理フェイスジャンが苦手だったんですが、毎日食べるごとに好きになり、食事の面では困る事はないです。

印象に残った事としては、サマータイムを体験した事です。今の日本にはないので、ブラジルに来て初めて知る事が出来ました。

ポルトアレグレの教会ではドイツ式の礼拝が行われています。基本的に歌いながら礼拝を進めていくような感じで、聖餐式のときは皆で手をつなぎ、抱き合ってお互いを讃えます。ブラジルも日本と同じで若い人がとても少なく、お年寄りが多いです。

米国のキャンプスタッフ研修に日本の青年を派遣！

JELAと日本福音ルーテル教会(JELC)は青少年の育成を共通目標に掲げ、海外のワークキャンプに毎年若者を派遣していますが、今年は新型インフルエンザの影響でそのいくつかを中止しました。そのかわりに、アメリカ福音ルーテル教会が運営している青少年キャンプのスタッフとして人材を一名派遣し、キャンプ運営について実践的に学んでいただきました。以下にそのレポートの中心部分をご紹介します。

米国のルーサーリッジ・キャンプにスタッフとして参加して

日本福音ルーテル大岡山教会
松岡あゆみ

不安と希望の間で見出したこと

今回の研修は、始まりの場所でした。それは、日本でスタッフとして学んできたことを見直すきっかけであり、新しいノウハウを取り入れるチャンスだったからです。私は3年前からJELCのティーンズ対象のキャンプにスタッフとして関わっています。「未熟者の私がアメリカで研修を受けても良いのか」という不安を抱きつつ、私だからこそ学べることを吸収しようと思い、参加させていただきました。

米国では、夏休みに一週間のサマーキャンプに参加することが定番です。私はルーサーリッジというルーテル教会のキャンプ施設で4週間滞在しました。夏の間滞在するスタッフは約60名おり、私はカウンセラーという役割で参加者と生活を共にしました。

直輸入ではダメ。「私たち用」にアレンジする必要性

キャンプ参加者を迎える準備のスタッフオリエンテーションは、ディスカッションの方法、参加者との関わり方、歌やゲームの指導法など、カウンセラーとしてのスキルを向上させるものでした。同時に、応急処置や参加者の年代に応じた特徴の説明などの情報提供も行われます。研修の内容や情報、ルーサーリッジの体制は新鮮でしたが、私たちが日本で行っているものとは異なるため、実践できるようにアレンジする必要性を感じました。

昨年までJELCのティーンズ部門が行っている「春の全国ティーンズキャンプ」のスタッフ研修会では、プログラム内容の共有を重視してきました。しかしルーサーリッジでは毎週キャンプが入れ替わるため、内容の打ち合わせ時間は1時間ほどで、主にスタッフオリエンテーション

で学んだことを活かしながら参加者をリードしていました。私たちが日本で行ってきたプログラム内容の共有は大切ですが、それらを活かすためにもリーダーのノウハウと自信を付ける研修を日本でも行いたいと思いました。

「違い」を活かして高めあう

毎週約10団体(約400人)が個々のプログラムに参加する中でも、堅信キャンプは「堅信を受けること自体が目的となっていて、その後の教会生活につながるということが問題」という話を聞き、衝撃を受けました。スタッフにも、教会に若者が一人という不安を抱えている人もいました。米国でさえ教会の若者が減っているという現状に驚くとともに、文化や価値観が違うからこそ互いに教えあい、足りない面を補っていけるのではないかと感じました。

最後に、今回の研修期間中に支えてくださった皆様、神様に感謝します。ありがとうございました。



JELA歴史コラム その6 借り物宣教から自前宣教へ



JELA常務理事 長尾博吉

1939年と云えば、国際情勢は暗雲垂れこめ、第二次世界大戦へと突き進んでゆく正にその前夜でした。その時、北米一致ルーテル教会宣教師社は、その名称から敵対国名を削除すること、名実ともに日本の民法公益法人となることが日本政府より求められ、社団はその名称を「日本福音ルーテル社団」と改められ、役員から米国人は追放され、役員・社員共にすべて日本人に改められました。そして、1941年12月8日に大戦が勃発し、1945年8月15日戦火は治まりましたが、国土の大半は戦火で灰燼と帰してしまいました。その頃の日本の教会は特に都市の教会及び宣教師間の多くが借地、或いは借家であったといわれています。その多くが戦火によって失われ、それらの教会は、信徒は

辛うじて残存していても、多くの宣教の拠点を失ってしまったのです。

1946年夏、元宣教師ミラー師を先頭に元宣教師達が順次再来日し始めました。しかし、日本全土はB29爆撃機による絨毯爆撃によって荒廃に帰しており、そこからの再興は厳しいものがありました。この日本の教会の宣教拠点の再興には、米国における北米一致ルーテル教会の日本宣教再開と支援の決議が大きく幸いました。当時国際為替レートは1ドル360円でした。この今日では考えられないほどに強い米ドルによる支援により日本の教会は、次々と始めは“かまぼこ教会”(米軍兵舎改造型)、次には、仮会堂(板張り簡易型)そして、本格的教会堂へと再建されてゆきました。

教会の宣教事業というものは、いつの時代もいづこの地においてもそうですが、有り余る資産や余力資金を背景になされることはなく、キリスト者の貧しい捧げものを

背景に始められ、やがてその宣教事業がその成果を認められる段階に入つてより多くの人々の支援を得て、その事業は拡大されてきたのです。よって、その初期の段階においては、福音宣教は必要な土地・建物等の手当は、まず借り物で始まるものだったのです。日本の開拓伝道においても、その当初においては変わるものではなかったのです。

そのように、第二次大戦以前は、借り物(借地・借家)でなされた宣教の拠点作りが、戦災による宣教拠点の喪失の反省から、「借り物宣教から自前宣教へ」の宣教拠点作りへとその宣教方策が大転換されたのでした。それは、幸いにも、強い米ドルと強いキリスト教国という経済的好条件の恩恵を最大限に受けたからでした。このキリスト教有利態勢を、戦後のキリスト教会は、真剣に的確に十分に生かし切ったかは、今現在も疑問の残るところであり、後の時代の歴史的判断に待たれるところでしよう。

日本の難民支援団体

JELAは難民支援を行うにあたり、政府や国連、民間NGOと連携して活動を行っています。今回はその中のキリスト教系NGOである難民・移住労働者問題キリスト教連絡会（JELAがこの「連絡会」に所属しているわけではありません）の取り組みについて、事務局の佐藤さんにご紹介いただきます。

「明日が見える生活へ」

～難民支援機能の連帯を求めて～
難キ連事務局・佐藤直子

◆難キ連とは？

難民・移住労働者問題キリスト教連絡会（以下、難キ連）は1989年難民船の西日本への漂着をめぐる排外キャンペーンのさなかに、難民や外国人労働者の様々な問題との取り組みを、市民レベルだけでなく、教会に広げ深めたいと願って教派を超えたキリスト教NGOとして設立されました。当時の移住労働者問題に関わる市民運動の情報ネットだった「アジア人労働者問題懇談会」の事務局を引き受け、「移住労働者と連帯する全国ネットワーク」結成後は、事務局を担当するなど、設立以来、キリスト教人道主義に基づき、在日難民や外国人労働者の痛みを共に担い、歩んで参りました。難民間題への意識喚起の啓発活動、入管被收容者面会支援を続けながら、当事者、支援者と、教会、支援団体の支援機能をつなげるパイプ役を使命とし、文字通り連絡会として活動しています。

◆支援機能の連帯を求めて

難キ連では2001年9・11同時多発テロ後に在日アフガニスタン難民の入管收容以来、入管被收容者面会支援を続けております。支援を続ける中で最も大きな問題は仮放免許可申請支援と仮放免後の受け皿整備にほかなりません。仮放免許可には、保証人と保証金（0～300万円…正規滞在化、あるいは送還など仮放免期間終結によって全額返還）、住居の準備が必要になります。仮放免許可を受け、收容を解かれても、住居の問題が当事者にも支援者にも一番の悩みになります。家賃が払えないなどの住居の相談が寄せられますが、Aさんの場合は深刻でした。滞日20年、難民として認められず長期收容と仮放免を繰り返す

ちに、收容を起因とした鬱病が悪化、加齢もあり、働く事もできず家賃や光熱費が支援者Bさんの個人負担になっていることに対する負い目は人間としてのプライドも喪失させ、Aさんの心身状態をますます悪化させました。教会の牧師先生や支援者の方々と支援対策を協議しつつも具体的な解決策は見つからず、暗礁に乗り上げていたところに救いの手を差し伸べて下さったのがJELAでした。難民シェルターJELAハウスへの入居許可を戴き、AさんやAさん支援者一同の物心両面からの負担が軽減されたのは言うまでもありません。入居3ヶ月後にはAさんに奇跡的に？ビザが出て、生活保護を申請し10ヵ月後には生活の目処も立ち、お世話になったJELAハウスの居室を、新生児を抱えた次の入居者Cさん家族のためにピカピカに磨き上げて民間のアパートに転居いたしました。現在は保護費を打ち切られたCさん一家が入居させていただき、身近で支援を続けている同じ教会の皆さんの負担を軽減、また過去においては第3国再定住を果たしたDさん一家も出国までJELAハウスにお世話になりました。

難民に限らず外国籍住民に厳しい住宅事情で、在留資格のない難民申請者が住居を探す事は困難を極めています。そのような社会情勢の中で、住居に関わるすべての経費負担から難民申請者を解放してくださるJELAの難民シェルターJELAハウスの運営に、心から感謝しております。明日が見えない難民申請者にとって住居の安定は計り知れないほどの心の安定を与えてくれます。未曾有の不況の中、急増する難民申請者は貧困の極みにあり、難キ連では、様々な場で支援機能の連帯を働きかけており、NPO法人セカンドハーベスト・ジャパンとの協力で多くの難民家庭に無料食料サービスが実現しています。

一人の個人、一つの団体が全ての支援機能を持つ事は困難ですが、難キ連が運営する難民日本語講座を例に挙げれば、庭野平和財団からの運営資金の助成、日本語講師ボランティア、テキストなど教材の寄贈、セカンドハーベストからの食料に加え、衣類やかばんなどの献品、医療など様々な相談対応へと支援機能の連帯が広がっていきます。機能の連帯は支援効果を倍増させます。難キ連は非常に小さなNGOですが、これからも「難民の、明日が見える生活のために」支援機能の連帯を呼びかけ働きかけたいと願っております。

2010年アメリカ・ワークキャンプ参加者募集

以下の要領で参加者を募集します。申込期限は2010年1月末日（必着）です。

- ◆派遣期間：2010年7月22日（木）～8月5日（木）
- ◆内容：ミネソタ州でのホームステイとイリノイ州でのワークキャンプ（家屋修繕、聖書の学び等、参加者の信仰的・人間的成長を促すプログラム）に参加。
- ◆参加費用：22万円（パスポート取得費用及び海外旅行保険費用は自己負担）。
- ◆問合せ・申込用紙請求先：
JELC+JELAボランティア派遣委員会
〒162-0842 新宿区山谷砂土原町1-1
JELC宣教室気付
電話：03-3260-1908
ファックス03-3260-1948
E-mail: workcamp@jelc.or.jp
- ◆選抜方法：2010年1月末日までに到着した申込用紙の中から派遣者を決定し、2月中に派遣の可否を申込者に連絡します。

<注意事項>

- ①2010年8月1日現在の年齢が14歳～20歳の方が応募できます。
- ②ルーテル教会員でなくても、クリスチャンでなくても参加できますが、聖書を学び話し合う時間が毎日あり、すべての行事に積極的に加わる事が求められます。
- ③牧師等数名の日本人成人が同行し、霊的・言語的側面から日本人参加者を支えます。
- ④米国の主催団体との手続きに時間がかかるため、申込期限が1月末日になっています。
- ⑤派遣確定通知受領から出発までの間にキャンセルされる場合は、その時点までに発生した費用をいただくことがあります。また、新型インフルエンザ感染状況その他により、日本からの派遣を中止する場合があります。をご告知おきください。
- ⑥派遣確定者にはパスポートが必要となりますので、まだお持ちでない方、更新が必要な方は申請の手続きを行う必要があります。
- ⑦派遣確定者には、日本福音ルーテル教会が毎年3月下旬に実施している「春の全国Teensキャンプ」への参加をお勧めします。教会になじみのない方は、クリスチャンのキャンプを体験しておくことが望ましく、米国に行く仲間どうしが出発前に親しくなる機会でもあります。このキャンプの詳しい情報は、米国派遣決定通知送付の際にお知らせします。

キャロル・サックが山田洋次監督作品に出演！

リラ・プレカリア(祈りのたて琴)のプログラム責任者であるキャロル・サック宣教師が、来年1月30日公開の山田洋次監督作品『おとうと』(出演:吉永小百合、笑福亭鶴瓶、蒼井優、加瀬亮ほか)の一場面に登場します。役柄は、「きぼうのいえ」をモデルにした在宅ホスピスの利用者に歌とハープによる祈りを捧げるカナダ人(役名エリザベス)です。短いながらも、リラ・プレカリアの実践そのものが大型スクリーンに映し出される貴重なシーンと言えます。

山田監督は『家族』『幸福の黄色いハンカチ』『息子』『学校』シリーズ、『男はつらいよ』シリーズ等で、移り変わる世相と日本の家族を描き続けてきましたが、今回の作品は、未曾有の大不況の中で混迷する現代を生きる人々へ贈る、希望と再生の物語だそうです。キャロルさんの天使のような歌声と、どこまでもやさしいハープの音色が日本中の映画館に響きわたることを想像するだけで興奮してしまいます。お見逃しなく。公式サイトは <http://www.ototo-movie.jp/>



2010年度研修講座 生徒募集

開講期間: 2010年4月~2012年3月
 内 容: ハープと歌、詩編、傾聴、瞑想の学び
 募集人数: 最高7名まで
 申込書類: 規定の申込書+推薦状1通
 申込締切: 12月20日(当日消印有効)
 問合せ・申込先: JELA事務局(中島)
 Tel.03-3447-1521
 nakashima@jela.or.jp
 たくさんのご応募をお待ちしております。



市ヶ谷教会で「世界の子ども支援チャリティ・コンサート」開催。

ルーテル市ヶ谷教会では、昨年に引き続き今年もJELAのアジア・ブラジル子ども支援のためのチャリティ・コンサート「LOVE7」を、去る9月13日、ルーテル市ヶ谷センターで開催いたしました。出演は、日本屈指のボイストレーナー安ますみさんプロデュースで、ミュージカル、ポップス、ジャズ、狂言など各界で活躍する井手麻理子、K.、CAYO、Salyu、田村直美、中山加奈子、西任暁子、宮原永海、山本野乃香、坂井和也、国府達矢、善竹富太郎、藤山高浩、安田岳弘、(以上ボーカル)、大塚利恵(ピアノ)、木村雅彦(シンセサイザー)、根岸和寿(ベース)、佐々木敬(ドラム・パーカッション)、新子和宏

(ギター)さんらのベテランプレーヤー。それぞれのファンの方々も集まって、立ち見の出る盛況ぶりでした。収益金はそのままJELAに寄付していただき、世界の子ども支援のために用いられることになりました。ご協力を心より感謝いたします。



(2009年7月1日~9月30日)

● 各プログラム支援献金+百周年祝い金

安藤淑子/石崎勝/石田浩子/伊東節子/岩津美禰子/上原文子/太田滋子/大中真理/大原英子/乙守望/乙守ミチ子/兼岩恵美子/蒲田幼稚園/岸根武子/北川輝子/九州ルーテル学院/京谷信代/清重尚弘/清田純次/釧路教会/Kパッチワークの会/小菅可代/桜井永之/坂根里辺香/佐藤義雄/霜尾閑子/下関教会シャローム会/白鹿市十郎/杉浦りえ/鈴木連三/関口佳子/関根弘子/関本憲宏/園山繁俊・道子/高田紀子/高橋佳子/田中美紗子/玉名教会/角田健/東郷優子/中村桂子/中村孝治・敬子/芳賀明子/芳賀美江・直哉/早瀬康平/原田恵美/原田佳澄/平田幸子/平林洋子/古川文江/ベンケ・パトリック/保谷教会/益永和代/松隈貞雄/南節子/山県順子/山際喜佐夫/山下勉/山本了/若原奇美子/渡辺聡/Elk Hom Lutheran Church/P. Reis & R. Flannery 他匿名複数

● 賛助会費

大澤朝子/大谷忠雄・妙子/乙守ミチ子/鳥飼勝隆・豊子/森涼子/安みぎわ 他匿名複数
 以上、敬称略。
 ご協力ありがとうございます。
 匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

編集後記

元フォーク・クルセイダーズの加藤和彦さんが突然自殺しました。「あの素晴らしい愛をもう一度」など、数々の名曲を加藤氏とコンビで作出した北山修氏(精神科医・作詞家)は加藤氏を悼む文章(朝日新聞10月19日付夕刊)の中で、数十年前の氏の言葉をとりあげています。「お前(=北山)は目の前のものを適当に食べるけど、僕(=加藤)は世界で一番おいしいケーキがあるなら、全財産をはたいても、どこへだって飛んでいく」というものですが、私は即座にマタイ福音書13章44節の畑に隠された宝のたとえを思い浮かべました。そして、日本で奉仕された宣教師の先生方が一番お喜びになることは何かということに考えが及びました。恐らくそれは、「世界で一番おいしいケーキ」のありがたさをすでに知っている私たちが、それを知らない人に教えること、そのケーキを人と分け合うこと、ではないでしょうか。(M)